

退職記念最終講義

「生涯学習～人はどう変わるか」

Lifelong learning : How does a man change?

講師 上 岡 国 夫

まず最初ひとこと謝辞を申し上げます。今まで定年退職された先生方がこのような最終講義を行うという慣行は、本学ではそうはっきりとは確立してはいませんでした。それにも関わらず、私にその機会を与えてくれました経済学会会長はじめ、理事の先生方に感謝申し上げます。今後このような慣行がしっかりと末永く続きますよう切望いたします。トップバッターとしての役割を果たすことが出来ないのではないかと心配いたしております。あわせて、私の最終講義に、土曜日にもかかわらず、多くの方々に聴講いただき、感謝いたします。同僚の先生方にはとくに謝辞を述べたいと思います。

私は出身が教育学部であり、専攻したのが教育心理学でありましたので、縁あって当時は未だ単科大学でありました高崎経済大学で教鞭を執ることになったとき、少々違和感を感じたものです。それは経済学について何らの知識がなかったからだと思います。しかし、次第にこの違和感とはとれ、むしろ経済学部にも所属することの良さを感じるようになりました。なぜそういうことになったのかはよく分かりませんが、1つは、それまでは茫として、私にとっては、とらえることが困難であった経済学と言うものが、実は大きな自由度をもった非常に大きな体系をなしている学問であると言うこと、私の考えでは、それは人間の欲求と充足の仕組みについての学問であるから、人間の営みを総合的に考える学問であると言うこと、従って私が専攻してきた心理学も教育学もその基礎には経済学があると言うことなどが次第に分かってきたからではないかと思えます。

教育機関には目的機関とそうでないものがあります。医学部は医師養成の、工学部は技術者養成の、教育学部は教師養成のための目的機関です。この目的機関では、実質的な教育内容、つまり実質科目によって大部分の教育課程が構成されています。経済学部もそれ相応の目的性があるにしても、それほど明確なるものではありません。比較的緩いものです。これが先に述べた「大きな自由度を持った」学部であるということです。この自由度と言うことは大変大事なことであります。目的的な雰囲気の中にいると思考作用も知らないうちに一定の方向に押しやられてしまいます。私は本学に勤務して以来25年になりますが、この自由の中で随分勝手な方向に学問的関心の変化が生じました。大きな関心の変化は次の通りです。

学習心理学的領域 言語学習の領域 ロシア語学習 ソビエト心理学研究 ペレストロイカ研究

教育行政及び教育問題 日本の近代化と教育 国際平和、国際理解 人類の幸福と福祉、環境保全。

今考えてみますと、これは私自身の内的な条件だけではなく、外的な環境条件も大きく作用したものであると思います。前の2つはまさに内的条件によるものでした。私の出発としての学問的な関心は言語習得の仕組みについてでした。それは心理学の重要な課題である思考と密接な関係があるからです。同時に当時左翼運動が盛んであったことの影響も無視できません。心理学や医学の中にも唯物論的な考え方が浸透して来て、「ソビエト心理学研究会」(ソ心研)という研究団体が組織され、私もそれに加わりました。ロシア語との関係はこのときできたものです。もともと外国語の勉強は嫌いではありませんでしたのでロシア語の勉強にはかなりのエネルギーを費やしました。しかし、そのうちに、ご存じのように、スターリンとハンガリー事件の評価を巡って、左翼運動は不幸な分裂を繰り返すことになり、それが「ソビエト心理学研究会」にも影響を与え、これは空中分解することになりました。

1980年代に入り、ゴルバチョフが登場し、ペレストロイカが提唱されました。「鉄のカーテン」の中にも何か人間の臭いが漂ってきた感じでした。その後の私の関心は、ソビエト社会で進行していたペレストロイカの動向に移っていきました。一時は私自身もユートピア的に描いていたソビエトは、どうしてこのような問題に直面することになったのだろうか、ソビエト市民はどのように意識を変えていくのだろうか、これが大きな関心事になりました。この目的を達成するためには直接ソビエト市民に接することが大事であると思い、それを可能にするロシア語の学習に一層がんばったつもりです。その当時の計画ではモスクワの街頭で市民に街頭アンケートをすることでした。心理学関係の専門的雑誌もたくさん読みました。

この時感じたことで今でも私の課題として残っていることがあります。ソビエトの学術論文は必ず書き出しに、「偉大なるレーニンの云々」とか「ソビエト共産党第 会決議によると云々」がありました。どこかの国では今でもありそうな話ですが、当時、ソビエトの学者たちは本当にそう思っていたのか、それとも何かがそうさせたのか、今でも大きな疑問です。もちろん、現在発表される論文はそうようには書き出されていません。そのうちに、1992年にソビエトは崩壊してしまい、市民は価値観の大きな変換に直面することになりました。社会心理学で言う「社会的態度の変容」場面が発生したのです。これこそ格好の研究テーマでした。この社会的態度の変容の問題は、集団や社会の意識変革の問題でもありますので、私たちの身近に存在します。

しかし、ちょうどこのとき、附属高等学校の問題が起き、それに携わることになったので、このテーマは中断せざる得ませんでした。今度は後期中等教育についてを勉強しなければなりません。教育行政の勉強が中心になりました。教育の問題は重要なものであることは、それまでも私の勉強の基底にありましたし、本学で教職課程を担当している関係もありまして、もう一度勉強し直すことにしました。実務を行いつつの勉強はつらいものもありましたが、多くのものをもたらしてくれました。最終的には、「何のために教育するのか、教育の目的は何なのか」という問題に到達しま

した。この問題は大きすぎて、そう簡単には結論が見い出せるものではありません。しかし、わが国の明治以降の教育史を考えてみると、そこには大きなヒントがあるように思えます。「教育は100年の計」ということばはまったく正しい。ここではくわしく触れることはできませんが、戦前のわが国の海外侵略は、教育だけではないにしても、教育勅語による明治教育の1つの帰結であると私には思えます。ですから、「人類の福祉と世界の平和」、これこそが私たちが教育を通して求めるものではないでしょうか。これには戦争と平和、国際理解、人権の尊重、貧困と疾病、幸福追求と環境の保全等々、人類がこれまで追求してきた永遠の課題が含まれています。今私のもっとも大きな関心事はこれらの課題です。これまで私が得てきたものがこの課題の解決への糸口になれば幸いと思っています。

しかし、このいずれも大成することなく、単に関心が移動しただけにすぎないのかもしれない。しかし、このようなことにのめり込めるものがあつたと言うだけでも幸せと言わなければならないかもしれません。このようなわがままが可能であつたのも経済学部にも所属したおかげであろうと思っています。

次に、本論に移ることにします。

心理学では学習を「行動の変容」と定義します。日本語で行動というと目に見えるものに限定しがちですが、英語の behavior はそれだけではなく、観察できない、内面的なものも含めますので、非常に広い内容を持っていることとなります。これは人生の全てのステージで生じます。従来は、これは人生の初期、つまり、0歳から25歳くらいまでの労働準備期に生じ、それ以降はあまり激しくは生じないと考えられていました。ですから、教育とか学習は学校が中心舞台でした。ところが実際は、学習は成人期においても、老年期においても激しく生じます。農業中心のかつての社会では、一度成立した行動様式のその後の変化は無用であり、むしろ邪魔なもので、それまでに成立した様式を守ることがもっとも重要なことでした。このような事情はつい最近まで同じでした。若いときに獲得した知識、技術は人生のもっとも重要な基底をなして、これを変えることはよくないとされていました。

しかし、社会の変化が激しくなり、われわれの平均余命も非常に長くなりました。80年の人生の中で生じる社会の変化は実に激しいもので、若いときに習得したものが一生にわたって通用することはなくなりました。ここに生涯にわたる行動変容の必然性が生じてきます。準備期に獲得したものがそのまま一生にわたって使えることにはなりません。それでは準備期の学習＝教育は無用かという疑問が生じてきます。

そこで、私は教育学上の概念である、実質陶冶と形式陶冶を考えて見ます。この2つの教育学上の概念は中世以来、教育学においては論争の的でした。前者は、学校は社会で必要とされる実質的内容をもつばら教育すべきであるというもの、後者は社会では直接には利用できないが、社会のさまざまな状況に応じて発生する課題の解決のための能力、つまり形式的能力を教育すべきである

というものです。わが国の学校教育においてもこの2つの流れは明確に認められます。実科学校または実業学校と呼ばれる学校は戦前期には多く設置されました。その多くは現在の学校体系の中では実業高校または職業高校となっています。農業高校、工業高校、商業高校などがこれです。各種の専修学校もこれです。前述の目的機関もこれに属します。そこでは社会が求める教科内容、つまり実質教科が教育されています。一方、明治時代に官立で設置された多くの中学校や高等学校は形式的な科目を中心に教育内容が組み立てられていました。これらの多くは今は普通高校や大学になっています。教育内容は形式科目が中心で、そのまま社会では使えないが、さまざまな形を持って発生する諸問題の解決能力、つまり、抽象的、論理力、推理力等の形式的能力を養成することを主たる目的としていました。激しく変動する社会では実質陶冶はあまり意味をなしません。時の流れが緩やかであった時代では、一度獲得した実質的内容は一生の間、役立ちます。しかし、現代社会はそうではありません。

この正月の新聞には新しい年を迎えての抱負や希望がよく出されます。私は各界の著名人たちの抱負の中で、教育に関係したものをいくつか興味をもって読みました。「即戦力の養成を大学教育に求む」という社長はかなりの数に上ります。日本の大学は社会が求めている教育を行っていないという主張がかなりあります。しかし、本当にそうなのでしょうか。即戦力を求める企業も激しい変革に見舞われています。即戦力はまさにその場における実務的能力ですから、企業活動の内容が変化すればもう役立ちません。大学に即戦力を求めるのは、私の考えからすれば、職能教育を省こうとする企業のわがままと言わなければなりません。真に必要なのは、どのように状況においても効果をもたらす一般的な能力です。これは形式的な能力です。激動する社会ではこのような能力が求められるのです。そういえば、一般教養復権という主張も見られました。大学では生涯学習を可能にする形式的能力を中心に教育を展開すべきと私は思います。

ここで関係してくる学習説について考えてみます。動物と人間を区別しているものの中でもっとも大きなものとして、人間は学習するが動物はしないと言うのがあります。しかし、不思議なことに心理学で取り上げられる学習実験の主人公はだいたい動物です。パブロフの条件づけでは犬、スキナーの道具的条件づけではネズミ、認知学習説ではチンパンジーが主人公です。

さて、パブロフは学習を刺激と反応の結合と考えました。ある刺激が与えら、そのとき別の刺激に対する反応が生じていれば、この刺激とその別の反応は結びつき、回数が多くなれば強化される、と言うのが彼の説です。ベルの音を聞いているとき、別の事情で唾液の分泌が生じていれば、この2つは結びつきます。以後ベルが鳴れば唾液を分泌するという新しい行動様式が成立します。つまり学習が成立したことになるのです。しかしながら、この説で説明できる学習は、きわめて限定的です。まずこの学習は何らかの行動様式がすでに存在する、ということが前提とされています。だから乳幼児が言語を習得するとか、善悪の区別を判断するなどというきわめて初期で、賞と罰によって学習が成立する場合には適用できても、それ以後の新しいものを獲得するといった創造的学習には適用できません。人類は今まで持っていなかった全く新たな行動様式を獲得してきたことを考

えれば、このパブロフ説だけでは不十分です。

パブロフの考えとは別の考えを持ったスキナーは、条件が変わったとき、最初は試行錯誤的ではあるが、今まで持っていなかった行動を積極的にいき、それが有効であると判明したときに、その後の行動様式としてそれが定着するという条件づけあるとして、道具的条件づけと言われる条件づけを発表しました。人はある環境に対して自分で最適反応を考え、それが有効であればその後の行動として学習する、有効でなければそのような行動はしないということを学習します。この仕組みは、反応すること自体が強化の道具となっているので、「道具的条件づけ」と言われています。もし人間が何もしなければ何も行動は変わらず、学習は起こりません。人類は進歩しなかったはずで、しかし、人類はものすごく進歩しました。スキナーのいう学習が起こったからです。人間の行動は道具的条件づけによって変化しました。ある行動をして自分でそれが有効か無効かを判断して、その後の行動変化を来すのです。これならば、環境が激しく、しかも頻繁に変化しても、最適行動はいつも発見できます。人類はこのような学習を繰り返しつつ現在の文明を作り上げてきたものと考えられます。

さらに学習説をもう1つ紹介します。ゲシュタルト学派が提唱する認知的学習説があります。これはチンパンジーを使った観察から得られたものです。彼らは檻の中に入れられたチンパンジーが天井に吊り下げられたバナナをどのようにして取るかを観察しました。檻の中には大小2つの箱がさりげなく置いてあります。最初はこの箱は彼にとっては無関係な物であり、彼の認知構造の中には入っていませんでした。しかし、これがバナナを取るための手段として使われ、目標達成のための手段となると、認知構造の中に組み込まれます。さらにそれでも届かなかったチンパンジーは箱を2つ重ねてバナナを取りました。このとき彼の頭の中には状況に対する認知行動が変化したのです。ゲシュタルト心理学派はこれを「認知地図の変化」などと言っています。いずれにせよ、頭の中に行動の変化が生じていますので、彼は学習したことになります。これをわれわれ人間の世界について述べてみるならば、物の見方が変わったのであり、世界観、人生観、社会観が変わったのです。今までは何らの関心もなかったもの、領域が、目的に向かう自分の頭のなかで突然有力な手段となり、以後切っても切り離せないものになる、ということはいしばしばあることです。学生の皆さんが高崎経済大学で4年間勉強すると、たくさんの知識を習得することになります。しかし、量として測定できないこのような認知学習は大変大事なものであることを確認して欲しいと思います。

学習説としてはあまり説得力はないが、社会的学習説というものもあります。自分では何も知らないが、誰かが行っていることを何気なく見ているうちに真似をして自分の行動が変わってしまうと言う説です。間接学習とか模倣学習とも言われますが、人間の学習の大部分はこのようにして起こったものであると私は思っています。

学習を考えると、必要なことがもう一つあります。それは環境との関係です。心理学では環境を、温度とか水質とか大気のような物理的なものだけではなく、人間関係、政治・経済、風俗・習慣などという対人関係や文化的環境まで考えます。発達心理学者のピアジェは、「発達における均

衡説」という考えを提唱しています。人間は自分の持っている内部的なもの（これを主体者のスキーマ schema と言います）と外部環境との間の矛盾や不均衡が存在するとき、これを解消（均衡化）しようとして自分を変えるか環境を変えようとする。前者は学習であり、発達です。後者は変革であり、革命ということになります。人類は長い発達の歴史の中で自分も進化しましたが、環境も変革し続けて来ました。環境保全の問題は、ピアジェの考えによれば、人類の進化の必然的結果ということになります。人類の偉大さは自分を学習によって大きく変えることが出来たことであり、人類の愚かさは同時に、必然的に環境破壊を来したということでしょう。

以上は心理学が説明している学習説の概要です。最初のパブロフの条件づけは人生の初期段階で重要なものですが、後の3つは自我が確立してきて一定の能力が確立してくると、活発になってきます。親にしつけられるのはパブロフ型の学習であり、自分から積極的に、しかも激動する社会の中で学習していくのは後の3つでしょう。環境的社会的条件があまり変化しない時代はパブロフ型の学習で十分対応できましたが、20世紀から21世紀にかけての激動社会では後者3つの学習が必要となってきました。学校教育においても、条件が前もって想定される社会での教育ではなく、何が出てくるか分からない社会にしっかりと対応できる教育が必要となりました。これは形式陶冶的な教育＝学習でなければなりません。「1を知って10を知る」ということばがあります。これは1つのことを学習すると、他のことも学ぶことになる、というものです。心理学ではこれを「学習の転移」と言います。右手で練習した効果が左手に及び、とか、スケートの上手な人は一度もしたことがないスキーもすぐうまくなる、とか、英語のできる人はすぐドイツも上達するということはよくあることである。この学習の転移は、形式陶冶の有効性を心理学的に証明するものです。大学での学習はまさにこのような転移力のある形式的能力を養成するにあると思います。社会に出てすぐ役立つ能力、これを「即戦力」などと言っていますが、激動するこれからの社会ではこれでは対応できません。

このような考えで私は自分自身の学習について考えてみました。

大学時代の学習を振り返ってみると、主体的意識による学習ではなかったという意味で、パブロフ型の学習が中心であった気がします。とくに、英語とドイツ語の言語学習が非常に大きな比重を占めていたので、主体的学習とは言えませんでした。しかし、言語の学習は非常に大きなものをもたらすものです。形式陶冶的な観点からすれば、論理的能力の養成に役立つと言えます。この言語の学習が私にもたらしたものはそれだけではなかったような気がします。それは「言葉は民族の魂」ということでした。言語とは何かと言うことが心理学でも大きなテーマです。「言語と思考」という著作はソビエトの著名な心理学者ピゴツキーの代表作ですが、彼は言語を伝達手段としてだけではなく、思考のもっとも大きな手段として考えています。確かにどの民族の言葉にもその民族の文化とか魂とも言えるものが集積されています。このような考えに到達したのは、高校時代の受験英語から脱却してより高くて広いところから外国語というものを学習しようとしたことからかもしれません。一度このような考えに到達すると、外国語の勉強は非常に楽しいものになりました。

しかし、概して言うと、私の大学での学習はそう確たる信念に基づいたものではありませんでした。昭和30年代前半の社会情勢はあまり甘いものではありませんでした。その上、自ら生活を守る必要もありました。ただこのような学生生活は、先の学習説で言うならば、認知的学習期とも言える時期で、人生や社会に対する認知構造を作り上げるのに大変大きな貢献があったかも知れませんが、大学卒業をすぐ前にして体調を崩し、休学のやむなきに至りました。これは非常に残念なことでありましたが、2年間の休学の末、体調を整えて復学した時は、職業上の資格を獲得することがもっとも大きな目標となりました。教員免許状を取得することによって、体に自信のないその後の生活を安定せしめようとしたのです。高等学校外国語(英語)科の免許がもっとも至近の距離にあったのでこれをねらうことにしました。外国語を今度は「飯の種」として勉強することになりました。休学していましたので、同級生はいないし、英文科での英語学習は大変つらいものがありました。どうやらその目的は達成でき、高校の教師としての職業生活が始まりました。私が生涯学習の意識に少しではありますが芽生えたのはこの時期です。大学でのいい加減な学習はものを教えるという崇高な仕事には耐えられものではありませんでした。それは教科の能力についてだけではなく、人を導くという仕事についてでもそうでした。もう一度学習し直さなければならない、という考えが日に日に強くなり、自由な時間を求めて夜間定時制課程に転属し、そこでもう一度勉強し直すことにしました。学習目的が一層明確になったので学習そのものは苦労ではありませんでした。むしろ楽しくさえありました。かくして、本来の学習目的であった心理学の学習へと再び向かうことになったのです。

今振り返ってみますと、26歳で高校の教師になり、その後大学院で心理学の勉強をし直し、高崎経済大学で心理学、教育心理学を担当してから教職歴は39年になりました。この39年間はいつも学生時代よりも濃密な学習がありました。自分では大きな「職能成長」をしたと思っています。たぶん、現代社会では大学という学問の場だけではなく、どこでもそれなりの職能成長が要求されています。条件反動的に習得した準備期の学習は、労働期間である30年～40年間は、そう大きく役立つことはなく、その間に環境に適応した新たな技術・技能、知識、考え方が要求されます。

ところで、わが国で、生涯学習の考えが具体的にでてきたのはそう昔のことではありません。教育基本法には、第2条に「あらゆる機会に、あらゆる方法で教育を行う」という規定があり、社会教育法も制定されています。しかし、教育は学校でという伝統が強く、生涯学習が制度の上で確立してきたのは1980年代の後半です。しかし、まだまだこれからの感は否めません。わが国では、「卒業」は学をおえるという意味であり、卒業式は学が成って修了したという意味の行事です。しかし、欧米ではそうではありません。イギリスのいくつかの大学やアメリカの大学では、commencementという言葉で卒業式を呼んでいます。これは学をおえるという意味ではなく、開始するという意味です。卒業は学習の出発点であるという認識です。生涯学習の考えは欧米では早くから一般化していたのです。生涯学習は決して学校教育の付け足しではありません。むしろ学習要求が内的に成立した後での学習を保証するものでなければなりません。

きょうは学生の皆さんは、試験の前の、しかも土曜日と言うこともあって、あまり出席していただいていませんが、学生の皆さんに、ここで声を大にして言いたい。きょうの初めの方で述べたとおり、本学の自由な雰囲気を最大限に利用し、あらゆる方向に思考と学習を拡大して欲しい。小さな目的のための勉強に閉じこもらないで、あらゆる場合に対応できる形式的能力を最大限に伸ばして欲しい。

学習は、最終的には、人生のためであるし、人類のためでもあります。人生の前半は労働準備としての学習と労働力伸長のための学習にならざるを得ませんが、真の自分を発見し、人生を享受するために学習が必要です。心理学的に言えば、マズローの言う、もっとも崇高な欲求である「自己実現欲求」の充足のための学習が最終的な学習ということになると思います。そして、この自己実現欲求とは一体何か、自分とは何か、つまり自己のアイデンティティを発見するための学習が必要です。

私の幸せについて一言話したいと思います。私の大学、大学院の時の仲間は、教育学部や教育学研究科を卒業し、教育学部で教職を担当している人が多いのですが、その人たちが私のゼミ卒業者のうち、70名以上もの方が教職はじめ教育関連の仕事についていると聞いて驚いています。西日本のいくつかの県を除いて全国の全ての地域で教員として活躍しています。これは私の誇りとするところであります。この伝統をこれからも引き継いで行っていただきたいと切望いたします。

平成15年1月25日 於 附属図書館ホール



それにいたしましても、人生を全うするためには健康がもっとも大事と痛感しております。私が本学に勤め始めました時から、多くの先輩の先生たちが定年退職を前にして病魔や事故に倒れています。定年まで勤めきることができるということは、多くの条件をクリアして初めて可能となることです。この点、私は私を支えてくれました私の家族、同僚の先生方、その他多くの方々に感謝しなければなりません。ここにいる学生の皆さんにいたしましても、心身共に健康に十分留意して人生を全うして頂きたいと切望いたします。

最後に、もう一度高崎経済大学の同僚の先生方と学生のみなさん、8年間の附属高等学校で一緒に仕事をさせていただいた同僚の先生方と関係者のみなさん、それに本学卒業生のみなさんに絶大なる謝辞を述べ、高崎経済大学の限りなき発展を祈念して私の最終講義を締めくくりさせていただきたいと思います。ご静聴まことにありがとうございました。